

日本語におけるフランス語からの借用語

— その意味をめぐって —

今 田 良 信

0. はじめに

近年、様々な外国語から日本語への借用語の流入は益々増えている感がある。

フランス語からの借用語もその例外ではない。しかし、日本語におけるフランス語からの借用語、特に原語と借用語の意味の相違に関する本格的な調査・研究は、筆者の知るかぎり、まだ見られない。¹⁾

外国語から自国語に取り入れられた語は「借用語」ないし「外来語」と呼ばれるが、本稿では統一的に「借用語」と呼ぶことにする。²⁾

筆者が、借用語、それもフランス語からの借用語の意味の問題を調べようとする直接のきっかけとなったのは、次の2つの記述である。

先ず、石綿(1976)³⁾によれば、次のような記述が見られる。

「外来語は、一般的に言えば、外国語との間に相違を持っている。…(中略)…意味用法にいたっては、その相違を正確に記述すること自身、また不可能であるが、具体物の名前でない限り、異なった言語間の完全な共通性はないと見てよかろう。外来語として日本語化するということは、発音・語形や意味用法の上でもとの外国語と離れて、日本語的に変わって、ようやく完成するわけである。」(p. 67)

続けて、日本語と外来語との相違のひとつである意味変化については、次の通り述べられている。

「英語などの、もとの外国語における用法と日本語に入った外来語の用法との間に相違がある場合である。これはかなり広い範囲の語に認められるもので、ここでも見本を示すことにする。⁴⁾もとの外国語の用法に比べて意味が広くなるもの、その一部に限定されて狭くなるもの、全く別なものに変わるものなどいろいろあるが、全体としてみると狭く限定されるものが多い。」(pp. 69-70)〔下線部筆者〕

次に、古浦(1997)⁵⁾によれば、日本語におけるイタリア語からの借用語の意味変化について、次のように述べられている。

「意味変化の生じている用例が少なく、結論めいたことは言いがたいが、およそ意味域は拡大する方向に向かっているように思われる。」(p. 67)⁶⁾〔下線部筆者〕

借用語の音韻・形態についての研究も興味深いが、ここで、筆者には次のような疑問が生まれた。

(1) 原語である外国語と借用語の意味の相違を記述する枠組みをどのように考えればよいのか。具体的にどのような型が考えられるのか。上記下線部の「～などいろいろある」型には他に考えるべきどのような型があるのか。

(2) 日本語におけるフランス語からの借用語の場合、意味変化にはどのような傾向があるのか。借用語一般に見られるように意味の縮小の傾向が強いのか、それとも同じロマンス諸語の仲間であるイタリア語のように意味の拡大の傾向が強いのか。

実際には、後で見るように、意味の問題を扱うのはそう容易ではないが、以上の点を資料から収集した用例に基づいて調べてみたい。対象はフランス語から日本語に入った、カタカナ語の借用語とする。

1. 資料について

本稿では、ある程度日本語に定着している借用語を対象にした調査を予備的に行いたい。いわゆる外来語辞典に挙げられている語は、語彙数も多く、定着度も上から下まで差がかなり大きいと考えられる。そこで、載せられた用例について、比較的に数が限られ、一定の基準に基づいて選ばれていると考えられる国語辞典を使用することにする。使用するのには次の辞典である。

金田一京助、他(1997)：『新明解国語辞典 第5版』三省堂（以後、『新明解』とする）この辞典より、フランス語から借用したとされるカタカナ語の単語を全て抜き出す。日本語における当該借用語の意味はこの辞典の記述によるものとする。

次に、その原語のフランス語の意味については、次の仏和辞典を用いた。

伊吹武彦、他編(1981)：『仏和大辞典』白水社

この辞典に原語の語（句）の意味が明確に出ていないとか分かりにくい場合などには、下記の辞典も参照した。

鈴木信太郎、他(1992)：『新スタンダード仏和辞典』（第4版）大修館書店

山田麿、他(1998)：『現代フランス語辞典』（第2版）白水社

なお、原語の古語法、古用法、卑語、隠語などの意味は除くことにする。

2. 収集した用例とその問題点

本稿には紙幅の制約があり、収集したすべての用例について、原語であるフランス語の意味と借用語である日本語の意味の全てを記述する余裕がない。そこで、それを示すのは別稿に譲るとして、ここでは用例を収集する際に気づいた問題点がいくつかあったので、それを指摘しておきたい。なお、用例数は、全部で 316語であった。

先ず、上述の用例の中に、他の外来語辞典では、借用語の原語が、フランス語でなく英

語となっているものがある。例えば、トリコット、ブラジャーは、吉沢・石綿(1985)⁷⁾では、原語が英語となっており、その原語の語源としてさらにフランス語が挙げられている。これらの借用語はフランス語から英語を経由して日本語に入ってきたものと思われる。これは、音形を原語の基準としているかどうかの違いなのであろうか。一方、意味の面で言えば、トリコットはフランス語と借用語の間で特に問題はないように思われるものの、ブラジャーの方は、現代フランス語では soutien-gorgeといい、brassière 「(赤ん坊の)袖つき胴着, 救命胴衣」とは物も異なり、フランス語と借用語とで、英語を間に介して、意味が転じているようである。ブラジャーだけを見れば、辞典別に原語の基準が音形によるか意味によるかで分かれているとも考えられるところである。ところが、アンツーカーを見ると、『新明解』でも吉沢・石綿(1985)でも原語はフランス語となっているにもかかわらず、借用語の「水はけをよくするために、赤れんがの粉のような土を敷いた、全天候型の競技場やテニスコート。また、その土。」という意味は当のフランス語には元々存在しない。それに、元の意味の「晴雨兼用傘」というフランス語は、現行では en-tout-casではなく、en-casに取って代わられてもいる。⁸⁾すなわち、借用語の持っている意味はフランス語から経由した英語の商標名 En-Tout-Casの意味に由来しており、英語で生まれたものなのである。にもかかわらず、この場合は両辞典においてフランス語が原語とされている。必ずしも意味が原語を定める基準となっているわけでもないようである。要するに、原語の決定に際して、辞典によって或いは同一辞典内でも、その基準がはっきりせずゆれている状況にあるということである。しかし、本稿では、一応資料に用いた辞典の記述を尊重し、それに従うものとする。

従って、ギロチン、コキールなどはその考案者であるフランス人名(Joseph Ignace Guillotin)に由来する guillotine および coquille がもとであり、意味的には原語をフランス語とするのに問題はないようであるが、『新明解』では他の例と同じようには原語をフランス語と明記していないので、用例からは外してある。吉沢・石綿(1985)では、前者は英語が原語となっており、後者はコキークとしてあってフランス語が原語となっている。『新明解』では、この場合は、その音形が決め手になっているようである。

次に、カジノ、マカロニは、どう見ても原語はイタリア語のように思われるが、⁹⁾これも辞典の記述に従い、用例に入れてある。

また、ドリア(doria), プルニエ(prenier), ラフランス(La France)などのように、個別の料理名、果物名で原語が仏和辞典に載っていないものもある。これらは用例に含めてあるものの、差し当たっては変化の型の判断ができない。

ステンカラー(フランス語soutien + 英語collar)のようなフランス語と他の言語との合成語は除いてある。

3. 原語と借用語の意味の相違の型

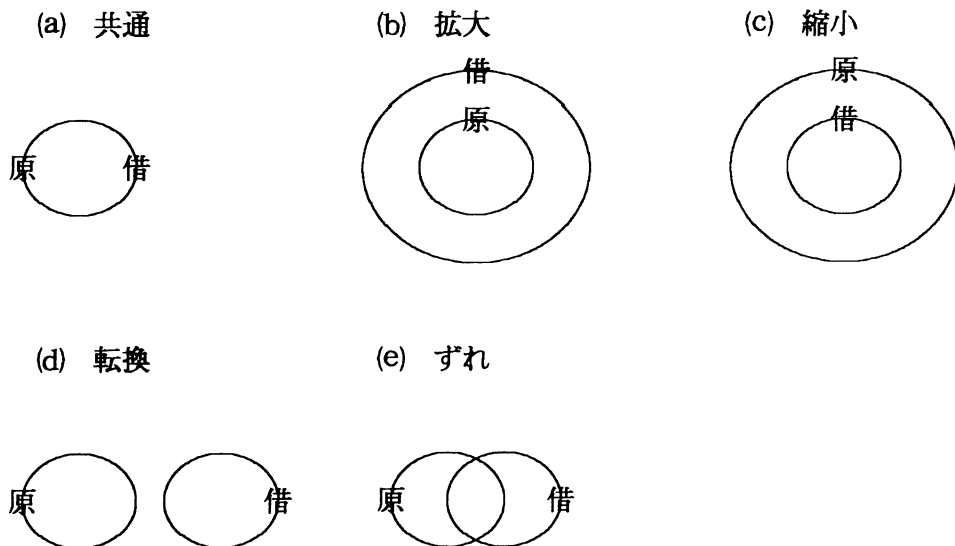
ここでは、0. の(1)で述べたように、原語である外国語と借用語の意味の相違を記述する枠組みをどのようにすべきかを考えてみたい。

まず、石綿(1976)によれば、原語の外国語と借用語の意味の相違について、意味が広がる（意味が拡大する）もの、その一部に限定されて狭くなる（意味が縮小する）もの、全く別なものに変わる（意味が転換する）ものが挙げられている。

これらに加えて、完全ではないにしても意味がほぼ同じ（意味が共通の）ものも考えられ得る。これは、意味が共通で変わらないのであるから、意味の「相違」ではないが、記述の枠組みの1つとしては不可欠であろう。

更に、理論的には、原語の意味と借用語の意味の間に共通の意味領域というか関連はありながらそれぞれに別の意味が存在するような（一応、意味がずれたとしておきたい）ものも考えられよう。

そこで、以上5つの型を立てておく。上述とは順序が異なるが、便宜上、これらを図示すれば次のようになるだろう。「原」は原語を、「借」は借用語を表し、円で示されているのが原語あるいは借用語の意味領域を示すものとする（(a)は原語と借用語の意味領域が共通で重なっていることを表している）。



4. 意味の相違の型による用例の分析

そこで、収集した用例がそれぞれ、具体的に上述の(a)~(e)のどの型に該当するのか、すべての型に当てはまる用例はあるのか、またこれらの型以外に他に考えられる型はないのかあるいはこれらの型に改良の余地はないのかということを含めて分析してみることにする。用例の分類の判断は、資料に用いた辞典の記述に基づいて筆者が行った。また、各型

への分類に疑問ないし迷いの残るものについてはその度合いにかかわらず疑問符(?)を付した。なお、借用語の直後に原語の語形を添えることにする。

4. 1. (a) 共通

この型に該当すると思われる用例：アール(are)，アールデコ(arts déco<arts décoratifs)，アールヌーボー(art nouveau)，アップリケ(appliqué)，アデュー(adieu)，アパルトマン(appartement)?，アバンチュール(aventure)，アペリティフ(apéritif)，アラモード(à la mode)，アルカイック(archaïque)，アンシクロペディスト(encyclopédistes)，アンシャンレジーム(ancien régime)，エシャロット(échalote)，エスカルゴ(escargot)，エリート(élite)，オーエス(Ho! Hisse!)，オーデコロン(eau de Cologne)，オペラコミック(opéra-comique)，オベリスク(obélisque)，オムレツ(omelette)，カジノ(casino)，ガッシュ(gouache)?，ガボット(gavotte)，カマンベール(camambert)，カムフラージュ(camouflage)?，カラメル(caramel)，キュラソー(curaçao)，キログラム(kilogramme)，キロメートル(kilomètre)，クーデター(coup d'Etat)，グラタン(gratin)，クラブサン(clavecin)，グラム(gramme)，グランプリ(Grand Prix)，グルメ(gourmet)，クレープデシン(crêpe de Chine)，クレソン(cresson)，クロッケー(croquet)，クロム(chrome)，コキュ(cocu)，コスメチック(cosmétique)，コニャック(cognac)，コンソメ(consommé)，コンテ(conté)，サンチーム(centime)，シードル(cidre)，シェフ(chef cuisinier, chef de cuisine)¹⁰⁾，ジオラマ(diorama)?，ジゴロ(gigolo)，シック(chic)，シュークリーム(chou à la crème)，シュールレアリスム(surréalisme)，ショービニスム(chauvinisme)，ジルコン(zircon)，スエード(suède)，ステアリン(stéarine)，ゼロ(zéro)，セロハン(cellophane)，センチグラム(centigramme)，センチメートル(centimètre)，ソテー(sauté)，ソリスト(soliste)，タフタ(taffetas)，タルト(tarte)，ディレッタント(dilettante)，デカ(déca-)，デカダン(décadent)，デシ(déci-)，デミタス(demi-tasse)，デラックス(de luxe)，ニュアンス(nuance)，ヌイユ(nouilles)，ノエル(Noël)，ノン(non)，バチスカーフ(bathyscaphe)，パリジェンヌ(Parisienne)，パリジャン(Parisien)，パルチザン(partisan)，バロック(baroque)，ピペット(pipette)，フィアンセ(fiancé(e))，フィジオクラシー(physiocratie)，ブイヤベス(bouillabaisse)，ブルバール(boulevard)，フォアグラ(foie gras)，フォービズム(fauvisme)，フォンデュ(fondue)，プチブル(petit bourgeois)，フラン(franc)，ブリオッシュ(brioche)，ブルジョア(bourgeois)，ブルジョアジー(bourgeoisie)，ベージュ(beige)，ベルモット(vermout(h))，ポタージュ(potage)，ボンサンス(bon sens)，ボンボン(bonbon)，マカロニ(macaroni)，マクラメ(macramé)，マドモアゼル(mademoiselle)，マヨネーズ(mayonnaise)，マロニエ(marronnier)，マロングラッセ(marrons glacés)，ミクロン(micron)，ミュージックコンクレート(musique concrète)，ミリ(milli-)，

ミリグラム(milligramme) , ミリメートル(millimètre), ミリバール(millibar), ムッシュー(monsieur), メセナ(mécénat) , メチオニン(méthionine), モード(mode), モスリン(mousseline), ユーモレスク(humoresque), ユマニテ(humanité)?, ルネッサンス(Renaissance), レーゾンデートル(raison d'être) , レジオンドヌール(Légion d'honneur), レジュメ(résumé)? , レストラン(restaurant), ローブデコルテ(robe décolletée) , ロココ(rococo), ロゼ(rosé)。

この型に属するとしてある用例で疑問符の付してあるものは、辞典の記述からでは、原語の意味と借用語の意味が共通していると認定するのには躊躇するものである。

4. 2. (b) 拡大

この型に該当すると思われる用例：サンダル(sandale)?, ゼラチン(gélatine), ブルネット(brunette), ボルドー(bordeaux), ポンポン(pompon)?。

拡大した意味の部分は、サンダル, ポンポンについては、日本語において、ゼラチン, ブルネット, ボルドーについては、経由したと思われる英語において付け加わったと考えられる。

4. 3. (c) 縮小

この型に該当すると思われる用例：アカデミー(académie), アカデミック(académique), アクメ(acmé), アグレマン(agrément), アタッシュエ(attaché) , アトリエ(atelier) , アバンギャルド(avant-garde) , アブサン(absinthe), アミ(ami) , アラベスク(arabesque), アルチザン(artisan)?, アルチスト(artiste)?, アンクル(ancre) , アンケート(enquête), アンサンブル(ensemble), アンデパンダン(Indépendants), アントレ(entrée), アンニュイ(ennui) , アンブル(ampoule) , エクレア(éclair), エスカロープ(escalope), エスプリ(esprit), エチュード(étude) , エトランゼ(étranger), エペ(épée), オークル(ocre), オードブル(hors-d'oeuvre) , オクターブ(octave), オノマトペ(onomatopée), オマージュ(hommage) , カナッペ(canapé), カフェー(café), ギニョール(guignol) , ガールソン(garçon), クーペ(coupé) , クルトン(croûton) , クレープ(crêpe) , クロッキー(croquis) , クロワッサン(croissant) , ゲートル(guêtres) , コケット(coquette), コケットリー(coquetterie) , コミューン(commune)?, コミュニケ(communiqué)? , コラージュ(collage) , コル(col) , コロッケ(croquette) , コンクール(concours), サーブル(sabre), サンボリズム(symbolisme), シネマ(cinéma), シャーシー(châssis) , シャコンヌ(chaconne)? , シャッポ(chapeau) , シャトー(château) , シャンソン(chanson) , シャンパン(champagne)?, シャンピニオン(champignon), ジャンル(genre) , シュミーズ(chimise) , シュミネ(cheminée), ジレー(gilet) , スフレ(soufflé) , スペクトル(spectre), ソムリエ(sommelier) , ソルフエージュ(solfège) , ソレイユ(soleil), ソワレ(soirée),

タブロー(tableau), デタント(détente), デッサン(dessin), デビュー(début), デフォルメ(déformer), トーク(toque), トリコット(tricot)?, トリュフ(truffe), ナポリタン(napolitain), ヌーベルバーグ(nouvelle vague), ヌガー(nougat), ネグリジェ(négligé), ノルマル(normal), パ(pas), バカンス(vacances)?, バゲット(baguette), ババロワ(bavarois), バラード(ballade), パラソル(parasol), バリエテ(variété), バレエ(ballet), パレット(palette), パンタロン(pantalon), ピエロ(pierrot), ビオロン(violon), ピケ(piqué), ピコット(picot), ビス(vis), ビストロ(bistro)?, ビバーク(bivouac), ビフテキ(bifteck), ビューレット(burette), ビュッフェ(buffet), ヒレ(filet), ピロティ(pilotis), ブイヨン(bouillon), ブーケ(bouquet), フォルム(forme), ブティック(boutique), フラッペ(frappé), フリカッセ(fricassée), フルーレ(fleuret), ブロック(bloc), プロムナード(promenade), ベレー(béret), ポエジー(poésie), ポトフー(pot-au-feu), ポロネーズ(polonaise), マチエール(matière), マチネé(matinée), マリオネット(marionnette), マリネ(mariné), マロン(marron), マント(manteau), ムース(mousse), ムニエル(meunière), メチエ(métier), メトロ(mé-tro)?, メモワール(mémoire), モビール(mobile), ランジェリー(lingerie), ランデブー(rendez-vous), リキュール(liqueur), リットル(litre), リラ(lilas), ルー(roux), ルージュ(rouge), ルーレット(roulette), ルポルターージュ(reportage), レアリスム(réalisme), レアリテ(réalité), レジスタンス(résistance), ロープ(robe), ローリエ(laurier), ロンド(ronde)。

問題点としては、意味の「縮小」といっても、原語が多義であって、借用語の意味が、そのうちのいずれか1つないしいくつかに限定される場合と、原語の1つの意味領域あるいは多義のうちの1つの意味領域について借用語で更にそれが狭くなる場合とがあるように思われる。後者は「特殊化」とでもして別に扱った方が良いかもしれない。しかし、この2つですべての用例をすっきりと分けられるということではない。例えば、フランス語の pantalon には①「(男女を問わず、一般的に)ズボン、スラックス」という意味の他にも②「〔舞踊での〕パンタロン(カドリールの第1フィギュア), 〔演劇での〕窓や扉の後に置いた舞台装置, など」の意味があるが、借用語のパンタロンは「すその広がった、ゆるやかなズボン。おもに女性用」という意味である。従って、借用語のパンタロンは、原語の①+②という多義から、①に限定されたという点と、①の意味が更に「男女一般用から主に女性用で、形もすその広がった」というように意味領域が狭くなったという点で、二重に意味が縮小している。このような例をどう扱うべきかという問題も残されている。

4. 4. (d) 転換

この型に該当すると思われる用例: アンツーカー(en-tout-cas), シフォン(chiffon)?, ズボン(jupon), デセール(dessert)?, ブラジャー(brassière)。

この型に入れた例は、次の「ずれ」の型の例との線引きに問題がある。例えば、アンツーカーは、フランス語のen-tout-casの「晴雨兼用傘」という意味と借用語の「全天候型の競技場やテニスコート。また、その土」という意味の相違から転換としたが、この両者の意味が元々の語源 en tout casの「どんな場合でも」という意味でつながっていることは確かであり、これを共通の意味領域と考えるかどうかで分類の結果が異なってくる。難しいところである。

4. 5. (e) ずれ

この型に該当すると思われる用例：アバンゲール(avant-guerre), アプレ<アプレゲール(après-guerre), エンシレージ(ensilage), オートクチュール(haute couture), オブジェ(objet), キャバレー(cabaret), クーポン(coupon), サボタージュ(sabotage)?, サロン(salon), シルエット(silhouette), タンブール(tambour)?, デカダンス(décadence)?, ノンブル(nombre), ピーマン(piment), プレタポルテ(prêt-à-porter), メートル(mètre), モチーフ(motif)?, モンタージュ(montage), ラメ(lamé), リトグラフ(lithographe), リンネル(linière), ロマン(roman)?。

この型に属するとした例については、上記の「転換」の型との間の問題の他に、原語と借用語の間に2通りに分けた方が妥当と思われる意味関係の相違が見られるという問題がある。

一方は、3. の(e)に図示したように、原語の意味と借用語の意味に共通の意味領域がありながらも、両者にそれぞれ別の意味特徴ないし多義の別義が存在する場合である。例えば、mètre とメートルは、「(長さの単位としての)メートル」という共通の意味領域を持っているが、mètre の「韻律、歩格、格調」という意味は借用語のメートルにはなく、メートルの「自動式の計(量)器」という意味は原語のmètre にはないようである。もう一方は、例えば、ensilage「(穀物・野菜などを保存するため)サイロに入れること」とエンシレージ「家畜のえさとして保存した、なまの草や野菜」、lithographe「石版師」とリトグラフ「石版画」、haute couture「高級婦人服仕立て店〔デザイナー〕(Cardin, Diorなど)」とオートクチュール「最新流行の仕立て(をした服)」などのように、ある事を行うことと行う物、行う人と行う物、行う所(人)と行う物の間の相違があるような場合である。これは、意味の「ずれ」というより、換喩的な意味の「ねじれ」といった方が良いかもしれない。ただ、この区別にも、両者が複雑に絡み合った用例が存在する。

また、プレタポルテのように、辞典の記述では、一応「(有名デザイナーの手になる)女性用の高級な既製服」となっているが、実際には、デパートなどでよく「既製服、レディーメイド」と同じように使われているものもある。原語の prêt-à-porterは「(haute couture で大衆版を出したものに限られる)手直しのきく高級既製服」のようである。これなどは、実際の用法では意味の拡大とした方が良いのかもしれない。¹¹⁾

4. 6. 判断保留の用例

できるかぎり5つの型への用例の振り分けを行ってみたが、少なくとも現段階ではどの型に属するのかまだ判断が付かないものがあったので、それをここでまとめておく。

アベック(avec), アラカルト(à la carte), アンコール(encore), キャビネ(cabinet), クレヨン(crayon), コント(conté), シャルマン(charmant), ショコラ(chocolat), テラス(terrasse), ドリア(doria), ノンシャラン(nonchalant), バリカン(Bariquand et Mare), ピューレ(puré), プルニエ(prenier), ベーゼ(baiser), メルシー(merci), ラフランス(La France)。

ここには、2つの型の間で、あるいは3つ以上の型の間でどれに属するとすべきか判断の付かなかった例が挙がっている。その原因としては、品詞の違いにより判断のできなかったもの、借用語が原語の省略形であるかどうかの判断に迷ったもの、また、原語が辞典に載っていないために挙げてあるものなどがあるが、詳しくは別稿に譲りたい。

5. おわりに

以上、5つの枠組みを基準として、各用例を分類し、かつその作業の中で出てきた個別的問題および枠組みそのものに関わる問題を指摘した。意味の問題を扱うので、当初から予想はしていたが、枠組みにもまだ問題があり、用例の分類にも多々問題が残っている。分類そのものを保留してある用例もある。従って、まだ結論と言い得るほどのことは指摘できないが、まとめとして、1. の(2)の疑問への一応の答えをしておきたい。

上記で振り分けた用例の数を、保留してある17例を除いて示すと次のようになる。上段は疑問符の付いたものを含まない場合、下段は含んだ場合である。なお、百分率の合計は端数の都合で、実際には100%にならない場合があることを断っておきたい。

(a)共通	(b)拡大	(c)縮小	(d)転換	(e)ずれ	合 計
118(43.1%)	3(1.1%)	133(48.5%)	3(1.1%)	17(6.2%)	274(100%)
124(41.5%)	5(1.7%)	143(47.8%)	5(1.7%)	22(7.4%)	299(100%)

この表で見ると、借用語の意味は、縮小(～特殊化)するものが最も多く、全体のほぼ半数を占めている。その次が共通するもので、これも全体の40%をこえている。それ以外は、大きく下がってずれ(～ねじれ)が6～7%, 拡大と転換に至っては1%強であった。従って、(2)の答えとしては、フランス語から日本語への借用語の場合の意味変化は、意味の縮小(～特殊化)の傾向が一番強く、拡大するものに比べれば圧倒的に多いと言えよう。

- 1) 日本フランス語フランス文学会編集『フランス語フランス文学研究文献要覧79/80～1992』(1984～1995)を見ても、借用語に関する論文は、森宗崇(1988)：「日本語になったフランス語に関する覚書」『東亜大学研究論叢』(東亜大学学術研究所)13-1, pp. 135-146 のみであった。この論考も特定の資料の用例を網羅的に扱ったものではない。
- 2) 田中春美(1988)：『現代言語学辞典』, 成美堂 (foreign wordおよびloan word の項)によれば、一般的には、外国から入ってきて、自国語に取り入れられた単語のうち、アクセントなど、ほぼそのままの音形で取り入れられたものを「外来語(foreign word)」といい、自国語の音韻体系・発音習慣に合うように変形し、多少の修正がなされたものを「借用語(loan word)」と呼ぶようである。外来語のほうが社会的により狭く、借用語のほうがより広く承認されているものの、両者の区別は必ずしも明確ではなく、わが国では外来語も借用語も一般に同義に用い、外来語の中に借用語を包括させているとのことである。しかし、日本語化している以上、カタカナ語に限っても、すべての語について、外国語そのものからは離れて、多少の修正は必ず加えられて日本語的に変わっていることは間違いないと筆者は考えるので、「借用語」のほうを選んだ。
- 3) 石綿敏雄(1976)：「和製英語と国際通用語」, 『外来語(「ことば」シリーズ4)』, 文化庁, pp. 65-73.
- 4) 挙げられているのは、英語、ドイツ語、フランス語の例で全てを示すことはできないが、フランス語の例は「ランデブー フランス語では「会合、会合の約束」。日本では「男女の密会」」という1例である。
- 5) 古浦敏生(1997)：『日本語におけるイタリア語からの借用語』広島大学文学部紀要第57巻特輯号3, 89 p.
- 6) 挙げられているのは、madonna とprima donna の2例で「madonna は、イタリア語ではもっぱら「聖母マリア」のことであるが、日本語の「マドンナ」には「憧れの女性」という一般的な意味も生じている。prima donna は、イタリア語では「歌劇の主役女優」のことであるが、日本語に借用されたプリマドンナは「花形女性」という広い意味であり、従って、何も歌劇を演じなくてもよいことになる。」とある。
- 7) 吉沢典男・石綿敏雄(1985)：『外来語の語源』(第6版)角川書店
- 8) フランス語の en-tout-cas「晴雨兼用傘」は副詞句 en tout cas「いずれにしても、ともかく(＜どんな場合でも)」に由来している。
- 9) 吉沢・石綿(1985)と『大仏和辞典』では、この2語の原語はイタリア語となっている。
- 10) 『新明解』では原語を chef de cuisinierとしてあるが、こちらのいずれかの方が適切と思われる。
- 11) 上記 3) 『外来語(「ことば」シリーズ4)』, 文化庁, p. 9 参照。